

り、才色兼備で知られた右衛門佐が、御台所付きとして都から呼び寄せられたのである。御台所に年寄りとして近侍し、惣女中頭となり千石を賜っている。

右衛門佐は廓翁に帰依していたため、神応寺の復興にあたり、右衛門佐が御台所を通じて將軍へと

長さは外側が一三一センチ、内側は一二九・五センチ、幅は外側十一センチ、内側十・五センチ、内側の左に細い象牙の環がついている。裏は全体が白布で、マネキの飾り糸の図柄は表が米、裏は×である。(図4・5)

もう一肩は赤地の金襴で、田相

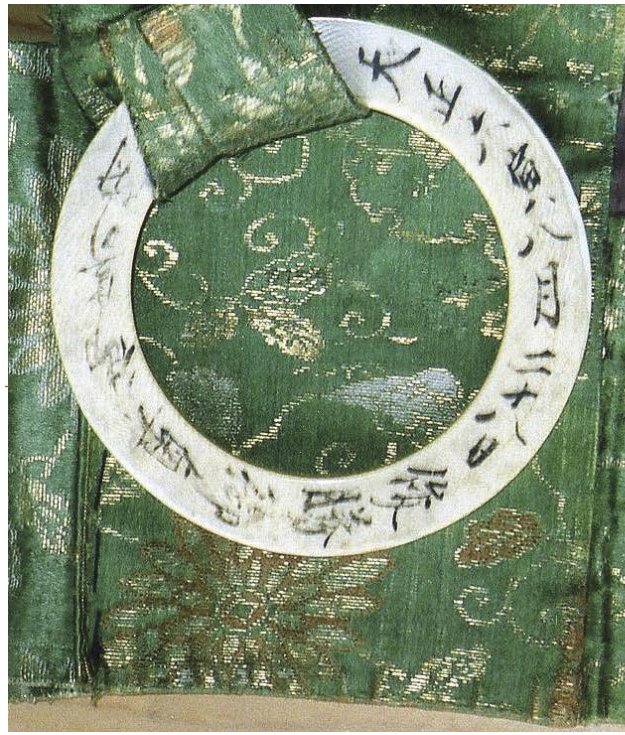


図1 墨書きされた環

りなし勸化に協力したものとと思われる。そのため廓翁は彼女に対し、卒後に石塔を建て永代供養料として全二十両を寺納し謝恩の意を表している。

綱吉の羽織を仕立て直した掛絡の一肩は、紅地の唐織で田相が縦四十七センチ、横六十センチ、竿の

が縦四十一センチ、横五十七・八センチ、竿の長さは外側が二七・五センチ、内側は二二・八センチ、幅は外側が十一・四センチ、内側は十一・三センチで、やはり左の内側に象牙の環がついている。裏はやはり全体が白布で、マネキの飾り糸は米である。(図6・7)

三肩目は御台所より寄進されたもので、黒地の広東鍛子であるが、田相は破損しているため、条相が確かでない。裏布は薄茶色の一枚布で、裏布より測った田相の大きさは縦三十七センチ、横六十二・六センチ、竿の幅は外側が十二センチ、内側が四・八センチである。初めは環がついていたようであるが、現在は無い。マネキの飾り糸は、表が米、裏は一となつている。

以上、戦国期から江戸中期の大掛絡、大五条の伝承と形態をながめてきたが、曹洞宗寺院に所蔵する於大の寄附した大掛絡と綱吉御台所の寄進した大掛絡ともに田相、竿、マネキも大きく環がついている。しかし、於大の掛絡は裏面が額で浄土宗と同じであり、現在の曹洞宗の掛絡とも同じである。御台所の掛絡は裏布が全体をおおっているため、臨済宗の掛絡と同じである。マネキの飾り糸は、於大の掛絡が一カ所綴つてあるのみである。しかし、御台所の掛絡は千姫の大五条のように米であり浄土宗と同じである。そのため、浄土宗、臨済宗、曹洞宗の折衷した掛絡ということになる。

ともに曹洞宗寺院に伝承され歴史の搭けていたものであるが、現在の曹洞宗の大掛絡になる前段階の掛絡であったということができよう。



図2 前から搭けた於大の掛絡



図3 千姫の所用した大五条



図4 神応寺蔵の掛絡(イ)



図7 (口)の裏



図5 (イ)のマネキ



図6 神応寺蔵の掛絡(口)